

第一四号に寄せて

折見 孝夫

第一四号をお届けします。今号は岡山の国語教育関連号となりました。この巻頭言以外、執筆者欄に私の名が載らないのは初めてです。個人雑誌を少しでも脱したいと願つておりましたので、うれしく感じております。

府川源一郎氏の紹介される御自身の図書は、五年前の刊行ですので、お読みになつた方も多いでしょう。紹介としては時間が経つていますが、その後の反響・評価を窺い知ることができます。府川氏からは早くに玉稿をいたいていたのですが、半年遅れてしまいました。申し訳ありません。

今村浩子氏のものは、第六号に載つた「戦後の中学校国語教科書におけるイソップ教材」に続いて、小学校国語教科書を調べ尽くした報告です。三年前にほぼ九割は出来あがつていました。あとは東京の教科書図書館などで詰めの調査をして完成というところでした。ところがそこをコロナ禍に見舞われ今日に至つたという次第です。世界で最も忙しい日本の教員が校務の合間を縫つて仕上げた労作です。

山西正子氏は、一九二七年（昭和二）に高等女学校に入学された御母堂が Once upon a time there lived a country

mouse and a city mouse ……と時折口ずるんでいらしゃったとの思い出話を披露してくださいました。「田舎のネズミと都会のネズミ」の冒頭ですね。英語を通してもイソップ寓話が浸透していった一コマです。英語教科書の一節なのでしょうが、それが何かは今のところ不明です。

私の書いたものでは、古い文献を引用する場合も、いわゆる旧字、異体字、俗字、略字等は常用漢字表の字体（新字体）に統一することを原則としておりますが、例外的にそれに従わなかつたことがあります。「辨・瓣・辯」は全て新字体では「弁」となりますが、使い分けを敢えて示すために、もとの文献の字体どおりとしました。また「處飾」という「虚飾」の誤植を、ある文献に見つけました。これを原則どおり「処飾」とすると、誤植に至つた事情が見えにくいので、これも原本どおりにしました。

字体の扱いには、いろいろと気になります。最近こんなのが見つけました。「朝日新聞」一〇一二年三月十九日の原武史「歴史のダイヤグラム」というカラムに、「朝日新聞」大阪本社版一九四一年一月一八日

朝刊の記事が「地下鉄などが混雜する」とは當然であるが、……と引用されていました。当然原文は「地下鐵」「混雜」となっているはずですが、こちらは新字体にして、「當然」だけ旧字体にしているのです。どうも腑に落ちません。この類はしばしば見かけます。

漢字は私程度の知識では手に負えないところがあります。『徒然草』第百三十六段に関連して、「塩」の正字が「鹽」だとは単純にはいえないという山田俊雄氏の説も思い出されます。もっとも六〇年近く経つてもこの考えは、一つの例外（小松英雄『徒然草抜書』）を除いて現今の『徒然草』解釈に反映されていないようです。

イソップ寓話をしばしば載せる昔の修身書では「脩身」という表記に出くわします。「脩」はてつきり「修」の異体字だとばかり思つっていましたが、別の字だと知りました。部首も「修」はニンベン、「脩」はニクヅキです。先の原則に従えば、「脩」は「修」に変えられません。（しかし、ちょっと待てよ）とも考えるのです。誰でも漢和辞典の知識を持ち合わせていいわけではありません。同じ文献に「修身」「脩身」が併用されてもいます。とするところの著者は私同様に「修」「脩」を異体字と誤解しているのではないか。ならば翻字に当たつて「修」に統一してもよいのではないか、と。

常用漢字表の「前書き」には「この表は……固有名詞を対象とするものではない」とあります。最近は姓名に旧字体や異体字を使う方も目に立ちます。中には姓は旧、名は新、あるいはその逆という方もいますから注意が必

要です。このように固有名詞にはちょっと面倒なことが出てきます。ここで僭越ながらクイズです。狂言界を代表する親子「野村マン作・マン斎」、私立大学「皇ガク館大ガク」「國ガク院大ガク」「志ガク館大ガク」、大手牛井チエーンの「ヨシ野家」ホールディングスの看板「ヨシ野家」、以上の傍線部分を漢字にしてください。
は「万作・萬斎」と親と子で異なります。次は「皇學館大學」「國學院大學」「志學館大學」です。國學院は「ダイガク」を含めて固有名詞と考えているのでしょうか。一方皇學館、志學館は「ダイガク」部分は普通名詞と捉えているようです。最後、「吉野家ホールディングス」の看板の「ヨシ」はなぜか「士」に「口」です。デザイン上こうしたかとも思います。因みにこの字は「吉」の俗字とされるからでしょうが、私のワープロソフトには入っていません。この字体については私も苦い（というほどではありませんが）経験があります。数年前、出身大学に卒業証明書の発行を依頼しました。ところが「オマエの名前はない。土に口のヨシ見孝夫ならある」というのです。事情を説明して発行はしてもらいましたが、どうも落ち着きません。「ウチはドミンではない、サムライだ」と息巻く人もいるようです。
前号にも種々お教えをいただきました。感謝申しあげます。「表が小さくて読めない。ルーペを使った」という御指摘が複数届きました。私自身老眼なのに読み手の立場をすっかり忘れてしました。